

図 書 ニ ュ ー ス 第 1 号

2007年5月18日

大阪府立北野高校 図書館

今年は1年生の貸し出し・来館が昨年に比べて少ないように思います。入学から1ヶ月、学校にも慣れてきたことでしょうか、そろそろ図書館にも足を運んでほしいものです。

「図書ニュース」を昨年同様、年間6号を出す予定です。本校の図書館にある本を中心にいろいろな本の紹介をしていきたいと思います。本の後にある【778/R9/1】などという記号は図書館での請求番号です。

今回は特集として映画の本を取りあげました。

劉文兵「中国10億人の日本映画熱愛史」(集英社新書)

【778/R9/1】

中国では1970年代後半から80年代前半にかけて空前の日本映画ブームが起きました。「君よ憤怒の河を渡れ」「サンダカン八番娼館望郷」「愛と死」「人間の証明」「砂の器」といった日本映画が続々と輸入されセンセーションを巻き起こしたのです。また、ほぼ同時期に「鉄腕アトム」「一休さん」「ジャングル大帝」「花の子ルンルン」などの日本製アニメが全国ネットで放映され子どもたちの間で絶大な人気を博し、さらに、それに続く形で「赤い疑惑」「おしん」などの日本のテレビドラマが放映されると驚異的な視聴率を記録しました。

当時の中国の人たちがなぜそれほどまでに日本映画や俳優たちに熱中したのか、本書は、その状況と背景について中国人自身の手によって詳しく書かれた極めて興味深い本です。最近僕が読んだ映画の本の中でも特に面白かったものです。巻末には1978年から91年にかけて中国で公開された日本映画のリストがあり、資料として興味深いし、文章も非常に読みやすく、おすすめの本です。

「映画術 ヒッチコック トリュフォー」(晶文社) 【778/T5/2】

ヒッチコックは「サスペンス映画の神様」と呼ばれる存在で、ヒッチコックを観ずに映画を語ることはできないと言っても過言ではありません。ヒッチコックについて書かれた本は数え切れないほどありますが、その中で絶対に読むべきはこの本です。ヌーヴェル・ヴァーグの巨匠トリュフォーによる、ヒッチコック全作品についての本人へのインタビュー集です。ヒッチコックが生涯に作った53本の映画の1本1本について論じられ、その制作の秘密が明らかにされていきます。とりあえずヒッチコックの映画(「北北西に進路をとれ」「知りすぎている男」「めまい」「ダイヤルMを廻せ」「見知らぬ乗客」「レベッカ」「疑惑の影」「サイコ」「鳥」など、どれでもいいのですが)をレンタルで借りて観ることです。そのあとで、その映画について書いてある箇所を読むと映画を2倍楽しむことができます。

蓮實重彦「映画狂人 神出鬼没」(河出書房新社)【778/H3/3】

映画狂人とはフランス語のシネフィル(cinephile)の訳語です。シネフィルとは、シネマテークなどで古今の映画を浴びるほど観ることによって映画を学び、その中から映画監督や批評家などになっていった人々のことです。ジャン＝リュック・ゴダールやフランソワ・トリュフォーなどがその代表的な人たちです。アメリカのスティーヴン・スピルバーグなどもシネフィルの1人と言っていいでしょう。

著者は自ら「映画狂人」と称し、その名を冠した本をシリーズとして10冊出しています。本書はそのうちの1冊です。このシリーズはどれをよんでもおもしろく、目からうろこが落ちるといふ表現がぴったりの本ばかりなのですが、残念ながら本校の図書館にはこの1冊しかありません。

著者はレンフィルム映画祭を初めとするさまざまな映画祭の仕掛け人として活躍し、また、海外の映画祭の審査員としてしばしば招かれ、さらに、その発言や書いたもの(英語・フランス語・イタリア語でも発表している)が世界の映画の状況に影響を与えていくというようなまさに神出鬼没の存在です。また、彼の映画講義を受講した人たちの中から、黒沢清や青山真治をはじめ世界的に評価される映画作家が多数輩出しています。

「映画狂人シリーズ」の1冊「シネマの煽動装置」は初めから終わりまでが1センテンスで書かれています。僕がそのことに気づいたのはこの本を終わり近くまで読み進んでからでした。驚くべきことです。文章を句点で切らずに、延々と続けていって、しかも不自然に陥らず、人に読ませることができるといふのは、きわめて高度な文章の技術がなければできない業です。

図書館には同じ著者による「魅せられて」「反＝日本語論」といった映画以外の本もあります。この人の文章は読み出したら癖になり、やめられなくなるかもしれません。



北島明弘「世界SF映画全史」(愛育社)【778/K16/1】

本文だけで1000ページあって、索引とフィルモグラフィーをあわせると1100ページの大著です。ジョルジュ・メリエスが本格的なSF映画「月世界旅行」を作ったのは1902年、映画の誕生から十年もたっていないでした。それから百年あまり、世界中で数え切れないほどのSF映画が制作されてきましたが、著者はそれらを年代順に、テーマ・ジャンルなどに分けながら詳述していきます。SF映画についてこれだけ浩瀚な本はちょっと他にないと思います。ファンにとってはまさに垂涎の的となる本でしょう。

マキノ雅弘自伝「映画渡世・天の巻」「映画渡世・地の巻」(平凡社)

【778/M6/1-1】【778/M6/1-2】

日本映画の父といわれた牧野省三の長男として生まれ、日本映画の黄金時代をカツドウヤ(映画はかつて活動写真とよばれ、映画人のことをカツドウヤと言った)として生きた筆者の破天荒な人生の記録です。

上下2冊の大冊ですが、話が面白いのと文章にスピードがあるので最後まで一気に読んでしまえます。個人の伝記にとどまらず、そのまま日本映画の興亡裏面史として読むことができる、他に類のない貴重な記録です。

森達也「ドキュメンタリーは嘘をつく」(草思社)【778/M7/1】

著者の森達也さんは映画監督ですが、本もたくさん書いています。ジュンク堂書店のサイトで調べると28冊もありました。北野高校の図書館にも6冊が入っています。よりみちパンセシリーズの「いのちの食べ方」と集英社新書の「ご臨終メディア」は今年の今年の図書ニュースで紹介があったので覚えている人もいるでしょう。「放送禁止歌」という本も最近入りました。

ドキュメンタリー映画は事実の積み重ねからなる客観的な記録であると多くの人は思っている、しかし、本当にそうなのだろうか?という問いからこの本は出発しています。

森さんはオーム真理教の信者に密着した「A」「A2」という映画を撮って国際的な評価を得ています。「A3」をつくる計画もあるようです。また、テレビドキュメンタリーとして「ミゼットプロレス」という小人プロレスラーを撮った作品はフジテレビで放映されています。彼がテレビで撮ろうとして果たせなかったテーマが屠場(とじょう)を舞台としたドキュメントです。魚を扱う築地魚市場はテレビで頻繁に取り上げられるのに、なぜ牛馬を解体する屠場を撮って放映するのはタブーとなっているのか。彼の発想は常に素朴な疑問から発しています。

ドキュメンタリーが日本のテレビのゴールデンタイムに放映されることはないし、お金にもならない。ドキュメンタリー映画の制作だけでは生活ができない。それでもなぜ、森さんは(また、森さんだけでなく多くの人々が)ドキュメンタリー映画を作り続けるのでしょうか。その答えがこの本の中にあります。映画の好きな人だけでなく、将来、キャスターや記者など放送局や新聞などマスコミ関係の仕事をめざしている人にはぜひ読んでほしい本です。



新 着 本 よ り

「武満徹著作集」全5巻(新潮社) 【760/T7/6-1~5】

武満徹(1930~1996)の名前を知らない人が残念ながら多いようです。しかし、吹奏楽部やオーケストラ部で活動している人や、音楽を選択している人なら、ベートーヴェンやモーツァルトとともに当然その名前を知っているべき人です。

指揮者の岩城宏之は「未来に対して、二十世紀を代表するといえる作曲家はだれか。僕があげるなら、ストラヴィンスキー、バルトーク、メシアン、そして武満さんだ。世界中の音楽家に問いかけても、ショスタコービチを数えたりの出入りはあっても、武満さんをはずす人はいないはずだ。日本より外国でははるかに評価が高かった。」と書いています。彼の「レクイエム」という作品を聞いたストラヴィンスキーが「あの小さな男がこんな厳しい音楽を！」と感嘆したという話は有名です。

さて、前置きが長くなってしまいましたが、ここに紹介するのは武満徹の文章をまとめたものです。実は、彼は文章の書き手としてもたいへんすぐれた人で、高校の国語の教科書にも何度も採られています。音楽に関する文章が多いのは当然ですが、彼の書くものは狭い意味での音楽の話ではなく、非常に幅広い事柄に対する関心に支えられたものなので、音楽に特別の知識を持たない人が読んでも大丈夫です。全5巻あって、それぞれが大冊ですが、全ページ読まなくても短い文章を拾い読みするだけでも得るものは多いと思います。

話は変わりますが、武満徹は大変な映画ファンとしても知られています。1年間に300本の映画を観た年もあるということです。忙しい時でも映画はよく観ていたようです。それだけでなく、実は、彼は100本を超える映画音楽を書いています。大島渚、篠田正浩、勅使河原宏、小林正樹、中村登監督らの名作の音楽を担当しています。彼の全作品はCD55枚からなる5巻の全集にまとめられていますが、そのうちの第2巻と第3巻が映画音楽に当てられています。映画音楽がクラシックの作曲家としての余技というようなものではなく、彼の仕事の重要な部分であったことが分かります。この著作集には映画に関する文章も入っています。

今回紹介した本は大部な本が多くなってしまいました。しかし、どれも本当におもしろい本ばかりです。北野高校の図書館は宝の山です。7万冊の蔵書があって、しかも毎年活きのいい本が入ってきています。その中に、みんなの関心・興味に合う本が絶対あります。ぜひ探しに来て下さい。ひまになったらなどと考えていたら、いつまでたっても読めません。わずかな時間を惜しんで読むくらいでないと北野高校生はつとまりません。また、高校時代のこの時期にこそ読まなければという本もたくさんあります。勉強に、部活動に、そして読書に貪欲に取り組んで下さい。